

天台本覚思想の日本の諸思想・諸文化への影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻本, 臣哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1004

博士學位論文

内容の要旨及び論文審査結果の要旨

第 46 号

2019年3月

武蔵野大学大学院

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、
2019 年 3 月 14 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の
結果の要旨を収録したものである。

目 次

氏 名	学位記番号	学位の種類	論 文 題 目	(頁)
辻本 臣哉	博士甲第46号	博士 (仏教学)	天台本覚思想の日本の諸思想・諸文化への影響	… 1

氏名	辻本 臣哉
学位の種類	博士（仏教学）
学位記番号	甲第46号
学位授与の日付	2019年3月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	天台本覚思想の日本の諸思想・諸文化への影響
論文審査委員	主査 武蔵野大学 教授 石上 和敬
	副査 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 蓑輪 顕量
	副査 武蔵野大学 教授 西本 照真

論文内容の要旨

本論文の目的は、天台本覚思想が日本の諸思想・諸文化にどのような影響を与えたかについて考察することにある。天台本覚思想は、仏教研究において極めて大きなテーマであり、様々な切り口から分析することができ、それが先学において行われてきた。例えば、その思想的な特異性、鎌倉新仏教との関係、中世文化への影響等、様々な角度からの分析が考えられる。そうした中、本論文では、日本の諸思想・諸文化への影響を採り上げる。

もちろん、日本の諸思想・諸文化への影響についても多くの先行研究があるが、一般民衆への影響という視点から、本論文では、諸思想・諸文化の中から、絵画（来迎図）、説話、神道思想に絞り込む。また、天台本覚思想と来迎図・神道思想についての研究は極少なく、説話についても『徒然草』等の一部の説話に限られていることも、こうした研究対象を選んだ理由である。したがって、本論文では、禅林寺山越阿弥陀図、『沙石集』、『神道集』、吉田兼俱（1435-1511）における天台本覚思想の影響について研究を行った。

天台本覚思想の研究については、島地大等氏の研究を契機に、裕慈弘氏、田村芳朗氏、末木文美士氏、大久保良俊氏、袴谷憲昭氏、松本史朗氏、花野充道氏等々、極めて多くの先学が存在する。本論文は、こうした先学の研究の成果を取りこみ、天台本覚思想の諸思想・諸文化への影響について新たな発見を目指し、少しでもこれまでの研究に貢献ができることを目的としている。前述したように、本論文では、禅林寺山越阿弥陀図、『沙石集』、『神道集』、吉田兼俱（吉田神道）を採り上げるが、これらの中で『沙石集』を除き、天台本覚思想との関係を考察した先行研究は極めて少ない。その意味では、本稿は、数多くある天台本覚思想研究に新しい視点を提供できるのではないかと期待する。

天台本覚思想の研究としては、その思想自体の研究と、その影響に分けることができると考えられる。後者の研究も、鎌倉新仏教を中心として仏教への影響と、仏教以外の思想や文化への影響に分けられる。本論文は、分類上この仏教以外の思想や文化への影響を研究することに属する。ただし、その場合でも、天台本覚思想の思想自体の研究や、他の仏教思想への影響についても見ていく必要がある。したがって、本論文の前半では、天台本覚思想の思想自体の研究や、他の仏教思

想への影響についての先行研究について見ていく。

本論文の本論の構成は、以下のようなになる。まず、第1章から第3章で、先行研究のレビューを中心に行う。一方、第4章から第7章が、本論文のオリジナルな研究であり、これまでの天台本覚思想研究に対する貢献になると考える。第4章から第7章は、仏教だけでなく、美術史、説話文学、神道等、仏教以外の分野も対象となる。そのため、こうした分野のこれまでの知見が必須である。これらの分野についても、数多くの先行研究を土台として研究を行っている。したがって、本論文は極めて学際的な研究と言うことができる。

第1章で、天台本覚思想研究史(天台本覚思想の思想自体の研究)を概観する。これまでの先行研究では、視点の違いから、十分議論が深まったとは思われないケースも見られる。こうした状況を整理するために、思想自体の先行研究において、教理史的アプローチ、思想史のアプローチ、社会的アプローチという3つの分類を試みた。教理史的アプローチでは、田村芳朗氏、末木文美士氏を中心に、仏教史の中で天台本覚思想の形成について見る。『大乘起信論』から始まった本覚思想は、中国では華嚴哲学、天台哲学で発展していったが、依然内在的相即論の段階に留まる。その後、日本に渡り、天台宗に引き継がれた後、密教の影響を受けて発展していった。そして、口伝法門を通じて絶対的一元論にまで達することになる。思想史のアプローチでは、袴谷憲昭氏と松本史朗氏の説を中心に、本覚思想に土着の思想が影響を与えていることを見る。如来蔵がウパニシャッドのアートマンとする説はユニークである。重要なことは、彼らの説が、教理史的アプローチでの議論を否定しているものではないことである。両者の違いは、視点の範囲の違いによるものである。最後に、社会的アプローチにおいて、口伝法門、本覚思想と差別思想の社会的な意味について考える。口伝法門は、血脈相承、法門の売買、修行不要論等から、墮落思想に結び付いた可能性がある。一方で、この口伝法門の段階で、天台本覚思想は完成されることを考えると、口伝法門を否定的にのみとらえることは危険であると考えられる。以上のような分類において、視点の違いやその価値観から、議論の争点がずれる傾向にあった天台本覚思想に関する先行研究を整理することができた。

第2章では、鎌倉新仏教と旧仏教の関係について、先行研究のレビューを行う。

法然（1133-1212）、親鸞（1173-1262）、道元（1200-1253）、日蓮（1222-1282）など鎌倉仏教の祖師たちは、それぞれ独自の思想を確立した一方、叡山に学んだという共通の背景を持つ。それぞれの宗派において、自宗と天台本覚思想との関係について、極めて多くの研究が行われているため、すべてを網羅することはできないが、代表的な研究を中心に、先行研究のレビューを試みた。鎌倉仏教の祖師たちは、叡山に学び、天台本覚思想が盛んであったという時代的背景を持っている。そのため、天台本覚思想の一定の影響を受けていたことは確かであり、特に若年の時ほど、その影響は大きいと考えられる。しかし、その後、祖師たちは、この天台本覚思想を批判及び止揚して、自らの独自の思想を築いていったと考えられる。

第3章では、天台本覚思想の仏教以外の思想や文化への影響について、先行研究を見る。これらの先行研究が、まさに本論文の主目的である諸思想・諸文化への影響に関するものであり、第4章以降の研究の土台となる。まず、他の思想への影響については、天台本覚思想からの一方的な影響だけではなく、当時天台本覚思想の抱えていた問題に対する解決方法を探ることによって成り立った思想もある。すなわち、天台本覚思想と諸思想が相互に影響し合っていたことは重要である。一方、その伝承方法の親和性も指摘できる。例えば、阿吸房即伝は、切り紙によって、その思想を伝えている。また、文献についても神道の一部の文献は、過去の偉人に仮託された形を取っている。さらに、能芸や茶道では、血縁を中心とした相承が行われている。天台本覚思想でも血脈相承や実子相承が行われていた。こうした伝承方法の面でも、天台本覚思想との関係性について指摘できる。

第4章は、来迎図の中において、禅林寺山越阿弥陀図を採り上げる。来迎図は、相対的二元論的思想の世界の描写であるため、絶対的一元論的の天台本覚思想とは、関係が薄い。しかも、禅林寺山越阿弥陀図は長く覚鑿（1095-1144）の影響が定説となっていた。これに対し、本章は、天台本覚思想及び証空（1177-1247）の影響の可能性について説いたものである。考察の結果、本図に描かれている風景、阿字、二体の持幡童子などから、証空とその門流の影響を受けていると考える。また、証空とその門流を通じて、天台本覚思想や当麻寺の影響があることを発見した。すなわち、山に桜と紅葉が同時に描かれ、季節すなわち時間を超越してい

る表現から、穢土即浄土、永遠の今といった天台本覚思想との親和性を指摘できる。さらに、本図の特徴である阿字についても、天台本覚思想文献『本理大綱集』の「阿字一心之文」において、阿字観と阿弥陀が結び付けられることになる。

第5章及び第6章は、説話を採り上げ、それぞれ『沙石集』と『神道集』を研究の対象としている。第5章の無住（1226-1312）による『沙石集』については、これまでいくつか先行研究が行われている。本章では、こうした先行研究を参考にしながらも、『沙石集』における天台本覚思想の受容のレベルに注目し、それと『沙石集』の思想の関係に注目した。考察の結果、『沙石集』は、天台本覚思想の内在的相即論と関係していると考えられる。しかし、顕現的相即論や、顕在的相即論といった絶対的一元論には至っていない。ただし、こうした絶対的一元論には至っていないことを、『沙石集』における仏教思想の限界とは捉えない。『沙石集』は、絶対的一元論が修行不要論至る危険性を考慮していた可能性がある。また、当時争っていた各宗派の共通点を見出すには、内在的相即論に留まる必要があったとも考えられる。

第6章の『神道集』については、天台本覚思想との関係についての先行研究がほとんどない。したがって、まったく新しい取り組みとなった。『神道集』では、元々仏菩薩で人に転生し、苦難の後、神になることが決められている神の申し子だけでなく、一般の衆生も受難により神に転生する。また、自業自得による受難でも神になったり、神になる者を助けたりすることで神になったりする。さらには、困難も受けず、あるいは悪事を尽くしても、神になる者の血縁者であるというだけで、神になれる。言い換えれば、誰でも神になれるということである。ここに、誰でも仏になれるとする天台本覚思想との類似性を見出すことができる。ただし、『神道集』では、鷲といった畜類の神への転生を説いているが、天台本覚思想に見られる草木成仏といった非情にまで拡大することはなかった。一方、『神道集』では、蛇鬼等の実者神も垂迹の神になれるとする。こうした実者神の肯定も、天台本覚思想との親和性が高いと言える。

第7章では、神道の中でも室町時代に発展した吉田神道とその牽引者、吉田兼俱の思想と天台本覚思想との関係について考察した。天台本覚思想と神道についての先行研究はあるが、吉田神道との関係を分析したものは、田村芳朗氏が天台本

覚思想と関連した反本地垂迹説と根葉花実論との関係を指摘した以外、極めて少ない。そのため、新規の貢献を期待する。吉田兼俱による文献を検証した結果、兼俱は、天地に神があり、万物に霊があり、人に心があり、この心が神であるとみなしている。すなわち、神は、天地、万物、人に内在することになる。また、神を知ることが悟りであり、神を知らないことを迷いとする。人に内在する神を自覚することが、迷いを脱し、覺りに至ることになる。こうした思想は、内在的相即論と極めて類似している。しかし、兼俱は、さらに一歩進める。万物に内在する神は、それぞれがつながっている。すなわち、神を通じて万物はつながっており、森羅万象は神によって生み出されていることになる。したがって、あらゆる現象は、良いことも悪いことも含めて、神によるものであり、言い換えれば、現象そのものが神の顕現化したものであり、それを真理として捉えられている。ここに至って、兼俱は顕現的相即論や顕在的相即論といった、絶対的一元論に近づき、極めて現実肯定の思想となる。したがって、吉田兼俱および吉田神道は、天台本覚思想と極めて親和性が高いと結論付けられる。

以上が、各章の結論であるが、以下では、これらの個々の結論から、さらに考察を行う。まず、天台本覚思想の受容のレベルに注目する。田村芳朗氏による天台本覚思想の発展段階は、基本的相即論→内在的相即論→顕現的相即論→顕在的相即論となる。内在的相即論では、永遠な真理ないし仏が、いわばポテンシャル（可能的）なものとして現実ないし衆生の中にひそむと考えられる。次の段階である顕現的相即論は、現実ないし衆生は永遠な真理ないし仏の顕現したものと考えられ、さらに、顕在的相即論では、現実の事象こそ永遠な真理の生きたすがたであり、そのほかに真理はないことを主張するに至る。

それでは、第4章から第7章で採り上げた、禅林寺山越阿弥陀図、『沙石集』、『神道集』、吉田兼俱は、どの段階に至るのであろうか。禅林寺山越阿弥陀図は絵画であるため、思想的な受容のレベルを決めるは困難であるが、穢土即浄土が表現されていることから、内在的相即論と顕現的相即論の間にあると考えられる。

『沙石集』は、有情すべてに成仏の可能性を説いているものの、始覚の重要性を説き、現実肯定が希薄であるため、内在的相即論に留まると考えられる。『神道集』は、あらゆる者が神に転生できることを説くと同時に、蛇鬼等の実者神も肯定す

ることから、内在的相即論と顕現的相即論の間にある。最後に、吉田兼俱は、万物に神が内在することを説くと同時に、現象そのものが神の顕現化したものとして捉え、それを肯定している。したがって、顕現的相即論や顕在的相即論といった絶対的一元論にはほぼ至っていると考えられる。禅林寺山越阿弥陀図が鎌倉時代中期から後期、『沙石集』が鎌倉時代中期、『神道集』が南北朝期、吉田兼俱が室町中期から戦国時代である。したがって、鎌倉時代中期の『沙石集』が内在的相即論の段階、鎌倉時代中期から後期の禅林寺山越阿弥陀図、及び南北朝期の『神道集』が内在的相即論と顕現的相即論の間の段階、室町中期から戦国時代の吉田兼俱が顕現的相即論や顕在的相即論の段階となる。もちろん、来迎図、説話、神道思想と分野に違いはあることは承知しているが、ある程度、時系列的に、受容のレベルが上がっていることが発見される。さらに、鎌倉前期の『発心集』に、天台本覚思想的な記述が見られなかったことも、こうした時系列的発展をサポートしている。

前述したように、島地大等氏や田村芳朗氏は、天台本覚思想を仏教哲理のクライマックスとして位置付けている。そう考えるなら、本論文で採り上げた思想や文化が、時代を経るとともに、その思想を進化・発展させたにとらえることも可能である。しかし、別の見方も可能である。『沙石集』でも述べたが、作者無住は、あえて内在的相即論に留まったと考えられる。無住にとって重要なのは、お互い争う宗派を仏教共通の認識へ導くことにあった。そのためには、皆がすべて仏に成れる可能性があるという内在的相即論が必要であった。一方、無住は、修行不要論を引き起こす可能性のある、徹底した現実肯定の顕現的相即論・顕在的相即論に至ることはなかった。これをもって、無住の思想が不十分なものであるとは考えられない。言い換えれば、顕現的相即論・顕在的相即論が、内在的相即論よりも思想的に優れていると言えないのではなかろうか。

仏教哲理のクライマックスとして位置付けられる、天台本覚思想の中心的な役割を果たした人物を特定するのが難しい。教えは、秘授口伝や切紙伝授によって伝えられたため、誰が伝えたのかのさえ知ることはできない。さらに、後年、こうした口伝を集めて教書が作成されるが、作成者は天台の有名な祖師の名前に仮託されている。鎌倉新仏教のように祖師の深淵な思考の結果生まれた思想という

よりは、恵心流・檀那流から分派した八派の中で、徐々に形成された思想である。そのため、教書には矛盾も見られる。もちろん、極めてユニークな思想であるが、顕現的相即論・顕在的相即論に至った天台本覚思想を絶対的に価値があり、発展の最終形態としてとらえることは、危険であるように思われる。したがって、発展の段階においてその思想の優劣を決めることはできない。また、その影響においても、天台本覚思想が一方的に諸思想や諸文化に影響を与えたというだけでなく、諸思想が、修行不要論等、天台本覚思想の抱える問題を解決しようとしたことも注目すべきである。無住や山王信仰の戒家の例は、その解決のために、始覚を再評価したのではないだろうか。これを天台本覚思想の発展段階から、未発展とみなすのではなく、止揚と捉えるべきであると考ええる。

それでは、内在的相即論と顕現的相即論・顕在的相即論を分けるものは、何であろうか。それは、現実の事象を受け入れられるかどうかにあると考えられる。すなわち、各個人の人生観に起因する。想像の範疇に留まるが、本論文で採り上げた吉田兼俱や、当時仏教界だけでなく多方面に大きな影響力を持っていた天台宗の高僧達、徐々に隆盛を極めていく茶道、華道、能などの家元などが、個人としての人生の成功により、この現実の事象を受け入れることができたと考えられる。一方、鎌倉新仏教の祖師達のように、当時天災等で苦しみ民衆を見て、また様々な法難を受けてきた者には、この現実の事象を受け入れられないのではないだろうか。仏教哲理のクライマックスとされる天台本覚思想であるが、その究極に至るかどうかは、極めて個人的なものであるように思われる。

天台本覚思想の顕現的相即論・顕在的相即論に至る絶対的一元論は、『三十四箇事書』において完成する。その成立は、田村芳朗氏によれば、1200-1250 ということになり、花野充道氏によれば、もう少し前になる。したがって、それ以降、他の諸思想や諸文化に影響を与えることになる。その理論の難解さから、諸思想や諸文化の受け入れ、及び受容のレベルは、徐々に進んでいったと考えられる。そのため、本論文で採り上げた諸思想・諸文化とその受容のレベルは、時系列に進んでいることと整合的である。しかし、その受け入れは、受容者の意思により選択されてきたことも重要であると考えられる。

次に、残された課題について言及する。まず、説話について、本論文では、『沙

石集』と『神道集』を採り上げた。また、本論文では、時系列による天台本覚思想の受容レベルについて考察を行ったが、来迎図、神道、説話とジャンルが分かれてしまっている。これを説話・随筆に絞って、再度検証する必要がある。具体的には、『沙石集』と『神道集』に、前述した『発心集』、『徒然草』を加える必要がある。特に、『発心集』、『沙石集』、『徒然草』は関連性が高く、『徒然草』については、天台本覚思想との関係について様々な先行研究が行われている。こうした説話・随筆を網羅することによって、より精緻な議論ができる可能性がある。

次に、本論文の結論において、諸思想・諸文化が天台本覚思想を単に取りこんだのではなく、そこには選択的、あるいは止揚することによって自らの思想としていることを指摘した。しかし、諸思想・諸文化が逆に天台本覚思想に与えた影響については、検討されていない。今後の大きなテーマになる。

最後に、長期の課題を含めて、今後の展望について述べる。天台本覚思想の研究は、様々な分野で行われている。しかし、その研究対象の多くは、当時の知識層である。一般の民衆の受容について説かれたものは極めて少ない。本論文でも、無住や吉田兼俱を採り上げたが、この範疇を出るものではない。ただ、『沙石集』においては、説話であるため、一般の民衆についても語られている。もちろん、無住という知識層のフィルターを通して語られているため、それが本来の民衆の考えであるかどうかは疑問が残る。それでも、民衆の受容についてのヒントにはなるのではないかと考えている。さらに、『神道集』は、信者を獲得しなければならないという目的を持つ唱道者によって、一般民衆に広められていった。その意味では、民衆が望んでいるものを取り入れなければならない。そのため、本論文では、『神道集』の理論部分と物語部分の差に注目し、その差が民衆の望んだものではないかという視点で考察した。ある程度の成果は得られたが、さらなる分析を行う必要がある。したがって、説話を研究対象にすることは、今後、民衆における天台本覚思想の受容について手掛かりになると考えられる。また、来迎図については、本論文では作成者の意図の研究であり、来迎図の受容者の一人である一般民衆への考察が不十分であった。ただ、この来迎図も、民衆の受容を考察できる研究対象である。今後、こうした説話や来迎図等を通じて、民衆における天台本覚思想の受容について研究を続けていきたい。

論文審査結果の要旨

審査論文は、日本中世において一定の役割を果たした天台本覚思想（以下、本覚思想）について、それまでの広範囲に及ぶ先行研究を精査・整理した上で、仏教教理以外の諸分野に本覚思想が及ぼした影響について考察した内容である。

まず、先行研究の整理においては、本覚思想自体の思想史研究、鎌倉新仏教への影響、さらに本論文の中心テーマである仏教以外の諸思想・諸分野への影響等に分けて、各々に関する数多くの先行研究を要領よく整理している。

続く、後半第4章から第7章が本論文の骨子であり、本覚思想が仏教教理以外の諸分野に与えたとされる様々な影響について論じている。考察は大きく三分野から成っている。一つは禅林寺山越阿弥陀図（来迎図の一つに分類される）に見られる本覚思想の影響についてであり、仏教美術の知見をも取り込みながら、同図に見られる本覚思想の影響について新たな視点を提供した。次に、説話集に見られる本覚思想からの影響が検討された。具体的には『沙石集』と『神道集』を取り上げ、前者については、田村芳朗の唱えた本覚思想の思想的発展段階と照合しながら考察が行われ、一方、後者においてはほとんど本覚思想との関係を論じた先行研究がない中で、丹念に文献を読み解きながら、神道理論の中にいかに本覚思想との類似性が看取されるかを明らかにした。最後に検討を加えたのは、吉田神道とその主導者である吉田兼俱の思想における本覚思想との関連性である。吉田兼俱は神道思想の体系化を目指す際に、多くの思想を活用したとされるが、その中に、本覚思想における「仏」を「神」に置き換えた如き、すなわち、森羅万象が神の顕現に他ならないとするまさに本覚思想に類する顕著な特徴が随所に見られることなどを明らかにした。

上記のように、本論文の後半4章は、いずれも先行研究が極めて少ないテーマについて、文献等を丹念に読み込むことによって独自に本覚思想との関連性を見出していったという意味で、独創性に富んだ研究と評価することができ、本覚思想との関連性について新たな成果をいくつも提示できたと考えられる。

一方、本論文でやや改善の余地があるとすれば、本覚思想自体の思想的発展の系譜を田村芳朗説に主に依拠しつつ研究を進めているが、この点は本覚思想から

の他思想多文化への影響を見ていくという本研究の根幹にかかわる部分であるだけに、そのことの妥当性について更なる検証があってもよかったかと思われる点である。実際、学位申請者は本覚思想について顕在論的相即論を最終的な発展形態と見なす考え方に疑問を呈しているわけであるから（97 頁中段）、本覚思想の思想的変遷を今少し自分自身で検証してから他思想多文化への影響を検討してもよかったのではないだろうか。次に、後半部分は、文献等の記述の類似性に主に着目した研究であり、文献研究として優れた成果を挙げているものと考えられるが、一方で、本覚思想、それを含めた仏教思想が今日とは比較にならないぐらい広範な影響力を持っていた時代性を考慮するならば、取り上げた各種文献を取り巻く周辺環境の輪郭（たとえば、著者を取り巻く周辺環境や同時代の思想状況等々）をさらに明瞭に浮かび上がらせ、それらの成果を思想内容と絡めながらの分析がなされると、より一層、立体的な影響関係の構図が浮かび上がってきたのではないかとも思われる。（もちろん、この点について一定の検討はなされていることは評価した上での指摘である）。今後、更なる考察を深めていかれることを念願する。

いずれにしても、本論文は、博士後期課程の審査論文として、十分なレベルに達しているものと判断される。